

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第9号

● 目 次 ●

東北アジア学術交流懇話会副会長・大道寺小三郎みちのく銀行会長 ロシア名誉領事任命	1
萬華鏡：モンゴル技術大学名誉教授号授与と技術のありかたについて	2
日本館便り	3
Area Report [SIGNAL]：「中国」・「モンゴル」・「朝鮮地域」	3
最近の共同研究会から	4
センター動向	5
客員教授紹介	5
環境技術移転（NKK）寄附研究部門の設置	6.7
新任教官紹介	7
「東北アジア学術交流懇話会」＝近況報告＝	8

東北アジア学術交流懇話会副会長・大道寺小三郎みちのく銀行会長 ロシア名誉領事任命

2001年1月23日、大道寺小三郎みちのく銀行会長が、長年のロシアとの友好交流活動での貢献によって、ロシア政府からロシア名誉領事に任命されました。同日、青森市のホテル青森で、駐日ロシア大使館のアレキサンドル・N・パノフ特命全権大使の手から任命書が伝達されました。この名誉領事は、日ロ両国の相互協定に基づくもので、日本国内では初めての任命です。

大道寺副会長のロシア交流活動は広く知られております。また1999年7月に、日本の銀行として初めて（外国銀行としては20番目）の進出を果たされ、100パーセン

ト出資の銀行を設立し、厳しい経済情勢にあるロシアでの本格的銀行活動の第一歩を踏み出されております。このモスクワでの営業は、送金業務などに不便を感じていた駐日日本大使館を始めとして、在モスクワの日本企業などに大いに歓迎され、またロシア政府や国民にもみちのく銀行の名前を高めたようです。

このような長年の日ロ交流に関する多くのご功績を考えたとき、このたびの名誉領事任命はいわば当然といってよいものです。本懇話会でも、大道寺副会長のこのたびの任命を心よりお祝い申し上げます。



伝達式



祝賀会の一齣



モンゴル技術大学名誉教授号授与と技術のありかたについて

東北大学東北アジア研究センター 教授 佐藤 源之

「日本の東北大学はアジアの大学の中でトップ5の一つと言われています。東北大学はモンゴル技術大学と共同研究を始め数年経ちました。数日前に東北大学東北アジア研究センター佐藤源之教授はモンゴル技術大学で地中レーダに関する研究についてセミナーを開きました。佐藤教授がモンゴルに来たのは今回初めてのことでありません。ウランバートル市における地下水変動を地中レーダという新しい手法により研究を行なうため、モンゴルを既に数回訪問しています。地中構造の情報取得方法は多数存在しますが、特に地下5mから10mまでの情報を得る方法として地中レーダは有望な技術の一つです。このセミナーは地中レーダという新しい手法を用いて、どの様な計測ができるかについてモンゴルの専門家、研究者、大学院生、学部学生を対象に開催されました。昨日行われたモンゴル技術大学の理事会は、佐藤教授にモンゴル技術大学の名誉教授号を授与することを決定しました。当大学の名誉教授称号は世界で有名なトヨタ自動車の会長である豊田氏などにも与えられました。これまでモンゴル技術大学の名誉教授号を受けた日本人は佐藤教授で4人になります。」(2001年1月17日の朝6時、6時半のモンゴル・ラジオ朝のニュースで放送された原稿を本学大学院学生ウネマンダフさんが翻訳)



2001年1月16日
モンゴル技術大学で
の名誉教授授与式

草原と放牧の国のイメージに誘われ、モンゴルを訪れる日本人観光客は毎年増加し、夏には日本から直行便が週に何便も運行されている。「スーホーの白い馬」は広く知られた童話であり、私自身モンゴルのイメージはこの絵本の挿絵で形成されたように思う。また小学生のころ「赤い英雄」を意味するウランバートルという名前の響きが、とても不思議なものに思えた。戦後長い間、多くの日本人にとってモンゴルは遠い国であった。しかし現在、関西国際空港から4時間、ウランバートルの空港に降り立てば日本からの援助による大型バスが日の丸とモンゴル国旗をつけて走り回っている。

モンゴルの美しい自然はおそらく、チンギス・ハーンの時代からそれほど変わらず残されている。しかし現実のモンゴルが直面する問題は数多い。民主化後の政治、経済の不安定状態は10年を経てもなお解消されず、首都での極端な人口増大とそれに伴う都市問題、生活環境の悪化にあえぐ一方、本来の産業基盤である遊牧民生活の変化など、今後いかに健全に環境と社会を保ちながら経済発展をめざすかはモンゴルの大いなる課題で

ある。

本年1月、モンゴル技術大学において、地中レーダの講義をするためウランバートルに降り立った。その日の朝、雪害調査のための国連チャーターヘリコプターがモンゴル西部で墜落し、日本人2人を含む8名が亡くなったのを知ったのは、次の日のテレビニュースだった。日本だけでなく、世界中の国がモンゴルの現状と将来のために援助を惜しまない。

地中レーダは人間一人が飛行機で持ち運べる程度の大きさの装置でありながら、地下水調査では非常に有効な計測方法である。降雨の少ないモンゴルでは地下水や凍土など地中に蓄えられる水が環境に与える影響はとて大きい。こうした環境問題に対し地中レーダ計測で得られる詳細な地下情報が有効である



モンゴルの草原で
の地中レーダ計測

と考え、私は1996年からモンゴルとの共同研究を開始した。またウランバートルの地下水は環境に加え地盤沈下、飲料水不足など社会的問題でもあり、ウランバートル市の水道供給地の地下水調査を地中レーダで行う国際共同研究を1999年より開始した。この間、モンゴル技術大学からは地質学、地下水理学等の研究者、またウランバートル市水道局などの協力を得て、多くの現地実験を行った。広大な草原で障害物もなく測定できる環境を日本国内で見つけることは困難であり、こうした実験フィールドと地中レーダ技術は極めて相性が良い。従って技術開発研究の立場からもモンゴルは理想的な研究環境にある。地下水計測結果についてモンゴル側研究者と討論をすること、またモンゴル側研究者にデータ処理などを会得していただき、将来的には彼等自身での測定を行っていただきたいことなどの願いを込め、今回モンゴル技術大学で集中講義を行うことにした。講義の2日目、パダルチ学長から昼休みに学長室によべると、大学の学部長会議が開かれており、名誉教授号授与がその会議で決まったところであると告げられた。馬乳酒を注がれた杯に聖なる青い布をかけ、これを一杯飲んだ後、学位記を渡された。地中レーダはモンゴルの状況に適合できるハイテクと考え、モンゴルのために技術を広めるため実行してきたことに対し思いがけず称号を受けたが、研究を進めるために協力をいただいているモンゴル・日本の研究者、大学院学生にも同時に与えられた栄誉である。

日本によるモンゴルへの技術・経済援助は莫大なものであるが、その効果を根付かせるためには、我々の日常の知識を超えた技も時に必要となる。例えば草原にトランジスタラジオを持ち込んでも、乾電池を手に入れるためにウランバートルまで車で3日かかるのでは使えない。高価な化学分析装置も純度の高い試薬が入手できなければ稼動できない。ハイテクは勿論必要だが、それを維持していくためにはいかに役立つローテクを利用するかが鍵となる。地中レーダを持って、草原地帯に行ったときのことである。どちらを向いても同じにしか見えない疎らに草の生えたゆるやかな丘陵地帯でどうやってドライバーが方向を決めているのか、1日車に乗っていてもわからなかった。同時に彼は車が故障したら何が何でも修理して町にたどり着くサバイバル技術をもつエンジニアでなければならない。電子メールを送れば外国から2日で部品が届くことに慣れてしまった我々は、彼らに技術者・工学者の原点を見る思いがした。

日本館便り

nihonkan・dayori

ノヴォシビルスクに駐在している、しばしば知り合いになったロシア人に食事に招かれることがある。そこで、これまでの経験からロシアの食事にまつわる見聞を綴ってみたい。ロシアの家庭に正式に食事に招かれた場合の形式は決まっている。まずは、前菜から始まる。前菜には各種のサラダや、キャビアののったオープン・サンドイッチ、ハム、ロシア風漬物などである。前菜には冷たい料理が用意されるのが通例であり、暖かい料理が出されるのは稀である。前菜が終わると、次にスープが用意される。日本ではロシアのスープといえばボルシチがすぐにイメージされるが、ボルシチ以外にもロシアの代表的スープは数種類ほどある。中でも興味深いのは「アクロシュカ」と呼ばれる冷たいスープである。これは夏にのみ出されるスープで、暑さをかき消すのに絶好の料理である。

スープが終われば、次に魚料理か肉料理が用意される。ノヴォシビルスクでは「スダク」（スズキ）と呼ばれる川魚が代表的で、それを煮た料理がしばしば家庭で出される。肉料理には



オビ湖の湖畔

様々な種類があるが、代表的なのは牛ステーキ、ロシア風ハンバーグの「カトレット」、ロシア風餃子の「ペリメニ」、ビーフ・ストロノガノフなどである。肉料理の次に、ティータイムとなる。ティータイムには必ず甘いお菓子が用意される。自家製のケーキやビスケット、あるいはチョコレートなどがテーブルに置かれる。ロシアの紅茶のいれかたは日本とやや異なる。ロシア

ではあらかじめ濃い紅茶を作りおきし、紅茶を入れる時にそれをカップの半分位までそそぎ、あと半分はお湯をそそぐ。紅茶を飲むときには、しばしば自家製ジャムが用意され、ジャムを食べながら紅茶を飲む。

日本ではロシアのアルコール飲料といえばすぐにウォッカを思い浮かべるが、ウォッカ以外にも、ビール、ワイン、コニャックもよく飲まれる。意外と知られていないのは、ロシア人がワイン通であることだ。旧ソ連圏にグルジアとモルドヴァがある

が、両国は良質のワインの生産地であり、ロシアに多くのワインを輸出している。その品質たるやフランスの上質ワインにも匹敵する。ロシアでアルコール飲料を飲むときは、必ずトースト（乾杯）がなされる。単に乾杯をするのではなく、一言挨拶をしなければならない。これには知性とユーモアが要求される。たいてい1回の食事で10回以上の乾杯がなされる。よくある表現が「友情に乾杯」、「全ての女性に乾杯」、「出会いに乾杯」などである。このような会食をロシアでは2時間から3時間かけて行うのである。（塩谷 昌史）

AREA REPORT



中国から 「中国製」を買うべきか？

先日、訪日した中国政府の方2人を接待する機会があった。まず、おみやげとして血圧計を買いたい、ということなので、東京・渋谷の大型電器店に案内した。そこで、これがおすすめ、という店員の話に乗って、某日本メーカーのものを買うことになった。が、レジに行って精算しようとしたときに一人が叫んだ？ なんてこった！ これはMade in Chinaだ！。それから、日本製はないのか？ それはお

すすめかどうか？ 値段は？ 中国製のものは中国でも同じものが買えるか？ 北京のどこで？ その場合の価格差は？ 中国製をおみやげに買っていったら中国で馬鹿にされるか？ そもそも何でこんなに中国製が多いのか？ などに関して、非常に真剣な議論が約45分間続いた。私は、「中国製でも、とにかく今買うべきだ」と意見したのですが、みなさんだったらどうします？ （明日香壽川）

モンゴルから モンゴルの大統領選と吹きすぎた「風」

二年続きの雪害に見舞われ、今年も既に倒壊家畜160万頭の損害を出しているモンゴルで、今度は2001年4月5日から10日にかけて秒速24～40メートルの吹雪と砂嵐が猛威を奮い、死者23人、負傷者22人、家畜倒壊153,300頭、行方不明家畜53,000頭を出す惨事となった。被害総額は2億6,560万トグルグ（24万3千ドル）に上っている。（Mongolia Online 4/24）雪害の影響で物価の高騰も進んでおり、昨年まで7.8パーセントに落ち着いていたインフレが、政権交代後の新税の導入、石油価格の高騰も手伝って再び10.4パーセントに戻っている。（Mongolia Online 4/21）このような中で、同国では大統領選挙戦が佳境に入っ

ている。選挙には現大統領ナツァギーン・バガバンディ、モンゴル民主党党首ラドナースムベレリン・ゴンチグドルジ、人民の勇気党党首ロヴサンダムビン・ダシニャム三氏が立候補している。優勢が取りざたされるバガバンディ氏は、西部五県を遊説したが、おりしも大吹雪の中、搭乗した飛行機が強風で遭難しかけた上に、住民から「災厄をもたらした不吉な人」呼ばわりされたという。（Mongolia Online 4/16）吹きすぎた「風」は選挙にどのような影響を与えるのであろうか。大統領選の投票は5月20日に予定されている。（岡 洋樹）

朝鮮地域から 技術立国に向かう韓国

この度の内閣改造で新たに就任したばかりの梁承澤（ヤン・スンテク）新情報通信省長官が、大統領特使として北京を訪問した。梁氏は情報通信技術のトップクラスの専門家、情報通信大学院大学総長である。政治家等さまざまな人物が候補に上った中で、金大統領のこの人事は、まさに技術こそが韓国の新しい社会をリードいくべきであるという強い信念の現れと見るべきであろう。

その梁長官の就任早々の中国訪問。日本の教科書問題等触れられはしたものの、やはり、朱鎔基首相との話は中国との情報

通信産業面での協力関係が主テーマとなった。最近韓国でも実施されようとしている韓国版セーフガード。その報復的措置として中国では韓国製携帯電話の輸入規制を行おうとしている。世界の携帯電話の40%を生産しているといわれる韓国の業界としては面妖な話。こうした動きへの牽制もあろう。

しかし中でも注目を引くのは、CDMA産業における連携関係の推進、そしてトランスユーラシアネットワーク構築に向けた協力関係の確認である。（成澤 勝）

● 最近の共同研究会から ●



共同研究報告会風景

平成13年3月13日（火）川北合同研究棟4階会議室でセンター発足時から本センターで行われ、すでに終了した「中国・モンゴルにおける精神文化と環境の相互作用に関する研究」、「近代化過程における東北アジア地域の変容の諸問題」、「東北アジアにおける交易拠点の比較研究」、「東北アジア地域における歴史・文化的背景および経済・技術的変遷からみた環境問題」、「東アジア出版文化史を通してみる社会変容の研究」、「東北アジアにおける関帝信仰の歴史的現在的研究」、「東アジアの儀礼・芸能における身体と社会の表象」の共同研究成果の報告会が開催され、活発な議論が行われ、成功裡に終了した。

以下研究成果の概略を紹介する。

「中国・モンゴルにおける精神文化と環境の相互作用に関する研究」

研究代表者：瀬川昌久 研究期間：1996～1998年度

平成8年度・創造開発研究経費（代表者・瀬川）をもとに、瀬川、吉田、岡の3名で構成、実質的には三者による個別研究であり、成果もそれぞれが個別の成果を個別の機会に発表した。

瀬川の個別研究成果：中国の民間知識体系である風水について、その環境認識としての側面をいくつかの事例から分析した。「風水」に関する知識は、環境上のバランス感覚と深く結びついている。それゆえ、「風水」上の適地とされる場所は、日照、防湿、防風、水の確保の点から言っても好適地である。また、道路開発やダム建設に際しては、「風水」は急激な環境変化に対する反対運動の根拠として主張されたりした。ただし「風水」説は単に既存の環境の影響を判定したり予測したりするだけの受動的なシステムでなく、環境に対するある種の積極的な働きかけをも含んでいる。それは「風水」の補修のための諸操作等に現れており、古くから大規模な自然の改変を行ってきた漢族の歴史に根をおろした自然観／環境観であると考えることができる。

「東北アジアにおける交易拠点の比較研究」

研究代表者：山田勝芳 研究期間：1997～1999年度

研究組織としては、研究代表者山田勝芳、分担者は当初9名、後2名追加。本センター発足段階の文系教員のフィールドワーク研究促進を図る計画を策定し、科研費・国際学術研究を申請した。1997・98年度はそれによって調査研究を行い、共同研究の期間としては99年度までとした。本研究の目的は、東北アジアにおける人・物・情報・資金の移動を媒介する交易関係をその拠点となる港

湾や都市に着目して、文化・社会・経済・政治の手法により、拠点相互間の関係等々に着目しつつ解明を進めることにある。調査・比較の視点と方法とを練り上げつつ研究を進め、科研費報告書（1999年3月）、東北アジア研究センター叢書第1号『東北アジアにおける交易拠点の比較研究』（2001年3月）を出すことができた。残された課題は多いが、今後の研究推進のための研究方法・比較視点の面で基礎を築き上げたと評価できる。



広州の日本企業広告

「東アジア出版文化史を通してみる社会変容の研究」

研究代表者：磯部 彰 研究期間：1997～1999年度

平成9年から平成11年にかけての共同研究「東アジア出版文化史を通して見る社会変容の研究」では、東アジア地域の近世文化形成と出版がいかなる関係にあるかを、研究会を通して分析し、その成果を個別研究発表、書籍などに公表する一方、包括研究とするための総合共同研究である「東アジア出版文化の研究」（平成12年～平成16年）へと発展させ、センター内の共同研究及び文部科学省の特定領域研究（A）の課題とした。

東アジア近世社会の形成と木版による出版事業の発展とは、極めて緊密な関係があった。それは、約1000年前に本格的な開始を見た木版印刷によって、知識の獲得や情報の伝達が飛躍的に増大し、古代・中世的な狭い社会の枠組みがはずされたからである。今日、東アジア世界、つまり中国・朝鮮・日本・チベット・モンゴル・旧満洲、そしてベトナムなどには木版を主とした新旧様々な多様な言語による書籍が残っている。それらの印刷物は、通常、刊本と呼ばれ、近代以降の書物とは区別されている。刊本はその歴史的な性格から、過去から現在までの多面的文化要素を継承し、保存する媒体であり、同時に将来に伝えるべき文化財である、と言うことが出来る。

本研究では、東アジア世界の近世から近現代に至る1000年間の木版技術を中心とする出版、及びそれを支える作家・作品や出版者、或いは為政者の言論政策などを一つの大きな文化＝出版文化＝として捉え、地域社会の形成や社会変革の歴史といかなる関係があったのか、筆写（写本）から印刷（刊本）へという技術の転換が社会に何をもたらしたのか、そして印刷から電子媒体による記録・伝達というIT革命は今日の社会をどのように変えるのか、などについて分析して解明、もしくは予測しようとする。

「東北アジアにおける関帝信仰の歴史的現在的研究」

研究代表者：山田勝芳 研究期間：1997～1999年度

研究組織としては、研究代表者山田勝芳、分担者4名。東北アジア全域に関わる信仰・社会構造等に関わる問題として関帝信仰があり、本センターには歴史・文化人類学・文学・儀礼・モンゴル史などの専門家がそろっているの、総合的な研究を進めることを計画し、科研費・基盤研究（C）を基に1997年度から1999年度までの3年間共同研究を行った。本共同研究の目的は、中国の漢族を中心と



長崎市館内観音堂内関帝

して、各民族や華僑・華人居住地域に広がりを見せている関帝信仰を、東北アジア各地域について、歴史的・現在的に学際的研究を進めることであり、第一段の成果として科研費報告書（2000年3月）を出し、またさらに別な形式の成果刊行を計画している。一層充実していくべき諸点もあるが、従来なかった総合的研究であり、この研究が日本の関帝信仰研究を刺激した側面もあった。

「東アジアの儀礼・芸能における身体と社会の表象」

研究代表者：成澤 勝 研究期間：1997年度～1999年度

東アジア文化圏の特に中国及び中国／シベリアの少数民族、朝鮮、台湾における儀礼と芸能の領域に注目し、以下のような身体の二重の意義を解明することに努めた。すなわち、第一に、見える形を持ち、有限で生物的限制を受ける生理的自然的身体のイメージがある。第二に特定の社会的役割を典型的に体現するような身体、あるいは社会組織が一つの身体に喩えられるような社会的身体のイメージがあると考えられる。本研究は、こうした身体観の重層性や相互矛盾に注目しつつ、儀礼文献や芸能関連の史資料を利用して研究を進めてきた。

センター動向

■専任教官の異動

【地域形成研究部門北アジア社会研究分野】

3月末をもって徳田昌則教授が停年退官し、4月より後任として工藤純一教授（環境情報学、デジタル画像解析学）が本学大型計算機センターより着任しました。

【地域形成研究部門東アジア社会研究分野】

3月末をもって丸山宏助教授が筑波大学歴史・人類学系に転任し、4月より後任として上野稔弘助教授（中国現代史、中国民族学）が文部科学省より着任しました。

■寄附研究部門

本年1月1日より次の寄附研究部門が設置されました。

【環境技術移転(NKK)寄附研究部門】

- 渡邊 之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術学（本年1月着任）
- 魁叶（スエー）助手：環境政策（本年4月着任）

■現在の客員研究者

本年4月～6月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

<客員教授>

【国内から】

- 和田春樹（ワダ、ハルキ）教授：東京大学名誉教授・ロシア国立

人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究

- 江夏由樹（エフ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論

- 横山隆三（ヨコヤマ、リュウゾウ）教授：岩手大学工学部教授、森林等の資源

【海外から】

- 馬建釗（マー、チェンチャオ）教授：中国、広東省民族研究所所長、中国少数民族の文化と宗教及び中国の民族政策

- 劉嘉麒（リュウ、カキ）教授：中国、中国科学院アカデミー地質学地球物理学研究所教授、中国における活火山の近代噴火史と人間社会

- ESENNOVA, Tamara（エセノヴァ、タマラ）教授：ロシア、カルムイク国立大学ロシア語・一般言語学科長・教授、カルムイク語教科書入門編の出版計画

<客員研究員>

- TARAN, Georgui S（タラン、G.S.）研究員：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部中央植物園上級研究員、ノア・データを利用したオビ・イルティシ川氾濫原植物群落の分布構造の解析とデータベースの構築

- 呼日勒巴特爾（フルバートル）研究員：中国、日本学術振興会外国人特別研究員、モンゴル語音韻史の研究

- BORONOEVA, Darima Tsybikovna（ボロノエヴァ、リーマツィビコヴァ）研究員：ロシア、国立プリヤート大学文化学部主任教官、日本におけるモンゴル系民族コミュニティに関する研究

（柳田賢二）

● 東北アジア研究センター客員教授紹介 ●

馬 建釗（マー・チェンチャオ）先生

このたび本センター客員教授として2月から5月まで滞在されておられます馬建釗先生をご紹介します。馬先生は、1954年中国の海南島にお生まれになられ、1983年に北京の中央民族学院（現代の中央民族大学）をご卒業になられました。以来、広州市にある広東省民族研究所に、少数民族研究の専門家として勤務されてきました。1990年には副所長、1993年には所長に就任され、同時に広東省宗教研究所の所長をも兼任されて、現在に至っておられます。

中国は人口の多数を占める漢族の他に、55の少数民族が暮らす多民族国家ですが、民族研究所は中国の主要な少数民族居住地域の省に配置され、少数民族の文化社会の研究と、その発展のための政策提言を担当しています。馬先生は、全国のこうし

た民族研究所の中でも最も若手の所長の一人で、広東省を中心とした中国南部の少数民族研究、少数民族政策の第一人者の地位にあります。特に、御自身が回族であることから、回族、ヤオ族、リー族、ショオ族などの少数民族の研究を中心に行っておられます。この他、ユネスコの特約研究員、中国民族学会、中国少数民族政策研究会等の常務理事を勤められるなど、中国国内外の学术界で広く活躍されておられます。

日本滞在中は、本センターや大阪の国立民族学博物館の研究者とともに、中国少数民族の文化と宗教および中国の民族政策に関する共同研究を複数展開されています。また、余暇には釣りが趣味で、既に仙台の川や池でも、そのご自慢の腕前を試されておられるようです。

（瀬川昌久）

環境技術移転(NKK) 寄附研究部門の設置

2001年1月、日本鋼管株式会社からの寄附により、新たに寄附研究部門が発足した。本部門は東北アジア地域に対して環境技術を移転することで環境問題の解決を実践的に行うこと、またそうした活動を通じた地域研究のありかた自体について研究することを目的としている。なお、本寄附研究部門の設置は、本センターの研究活動が社会的にも広く認められていることを端的に示し、かつ東北大学にとって大きな意義のあるものである。また、各国間にまたがる、あるいは、大学と企業とにまたがる技術移転の実現に向けてのプロジェクトの起案、調整も本研究部門の主要な課題である。寄附研究部門は現在渡邊之教授及び麴叶（スエー）助手が着任している。

始めまして、宜しくお願ひします

環境技術移転寄附研究部門教授 渡 邊 之

筆者はこのほど新設された環境技術移転(NKK) 寄附研究部門教授として東北アジア研究センターでの研究活動に参画することになった。

“アカデミズム至上主義を貫く大学の研究現場に企業の経営的センスを導入することが、成果を早期に社会に還元する上で必要不可欠”とする、前センター長徳田昌則先生（現東北大学名誉教授）の持論を具現化する第一歩として本研究部門が設置されたと伺っている。国立大学の独立行政法人化への動きが本格化しつつあり、大学における教育、研究活動についても適切な評価が必要との論議が高まっている今日、本研究部門の設置は先見性に富む試みといえる。追求すべき課題として環境に着目し、地域研究重視の視点から技術移転を取り上げ部門名称とすることで役割を明示した点についても東北アジア研究センターの本来的役割との整合性が認められ、充分な説得力をもつものといえる。しかしながら、それらを地道に、着実に実行することは必ずしも容易ではない。ましてやその重責を担うのが大学での活動に精通していない筆者であるだけに、いささか心許ない限りというのが実感である。

就任以来漸く3ヶ月が経過したところであるが、ここに来て自己紹介記事を書くように求められた。これまでの活動を中心にしてとのことである。筆者は大学院工学研究科博士課程（大阪大学）修了後NKKに入社、31年間、主として技術開発本部に在籍した。この31年間の活動をひとまとめにすることは容易ではない。その間、経験した職種を順を追って記すと、研究員、研究室長、所長スタッフ、商品開発チーム担当、企画部企画担当、計画調

整室長、基盤技術研究所副所長、技術企画部長、取締役総合材料技術研究所長、取締役鉄鋼技術センター担当、それに技監と多岐にわたる。研究に直接携わった期間は都合18年余の長きにわたる。もっとも3年間は室長として研究のマネジメントと後進の指導であったから研究に埋没した期間は会社生活の半分ということになる。高度経済成長期が終わり、安定成長期に向けて高付加価値化の追求が叫ばれる中、顧客の側からニーズが多数寄せられ研究活動は多忙を極めた。充実した日々であった。

企業では研究者として優秀と認められるとすぐさま管理職に抜擢され、その後想わぬ道を歩むこともしばしばである。今は専門職制度も設けられてはいるがその道を歩む当事者ですら決して歓迎してはいないようである。筆者も途中から大きく転進することになった一人である。

研究を離れて以降の活動は技術企画部長としての活動に代表される。全社を対象とした中長期技術開発計画の策定、特定重点テーマの企画推進、技術開発戦略会議の運営、予算計画の立案執行、設備投資計画の策定、組織再編、表彰、対外窓口、と業務は多岐にわたる。常に広い視野と判断力が求められ、経営的感覚が養われるやりがいのあるポストであった。技術にとどまらず、社会や経済の動向を常に注視し、はやくから環境問題にも取り組んできた。もとをただせばコストダウンのための省エネルギーが課題であったが、きっかけはなんでもあれ、昨年NKKは環境問題に世界で一番真剣に取り組んでいる企業にも選ばれている。忘れられないテーマにクリーンエネルギーの創製を目的としたDME研究がある。マスコミにも大きく取り上げられておりご承知の方も多いと思われるがナショナルプロジェクトとして大々的にすすめられているテーマである。こうした大規模研究を実施するには外部資金の導入が欠かせない。官庁、外郭団体、大学との折衝および連携を通じた提案、企画、推進活動も技術企画部長の重点業務であった。DMEプロジェクトでは、開発技術学会に「アジア地域新クリーン燃料研究会」を設けて産官学共同での調査企画活動を実施した。この研究会を母体に現在DMEフォーラムが発足し、筆者もこれに求められ参画している。対外活動も学協会活動にとどまらず、業界諸団体、政府系諸外郭団体等にひろがる。理事、幹事、委員として、時には会長、副会長の要職をも務める場合もある。広い人的ネットワークの構築はその後の大きな財産ともなった。

筆者はその後、図らずも企業の役員をも経験することになったがここでは省略したい。以上がこれまでに経験した職務の概要である。使用済みプラスチックの高炉資源化、塩ビ樹脂の脱塩素プロセス、シュレッターダス

ト処理、鉄鋼スラグを利用した炭酸ガスの吸収処理、などなど地球環境問題に関わる技術開発には多くたずさわってきた。こうした経験が当センターでの活動に少しでもお役に立てれば幸いである。

自己紹介

環境技術移転寄附研究部門助手 魁叶(スエー)

私は中国・内モンゴル自治区フフホト市出身、1973年9月から1984年7月までフフホト市モンゴル族学校で小学校、中学校、高校時代を過ごしました。1984年7月、大学試験を受け、自然環境に触れる機会が最も多いと思われた地理学部に入學。大学での勉強を通じ、自然環境に関する知識を深め、環境の大切さを改めて認識することができました。故郷の環境保全のために何らかの形で貢献したいという気持ちを持つようになりました。大学の卒業論文のテーマを「フフホト市の大気汚染について」にし、経済の発展につれ悪化しつつある都市環境の改善方法を考えてみました。1988年7月、大学を卒業後、内モンゴル食糧専門学校に勤め、1997年2月までの8年半の間「中国経済地理学」および「英語」の授業を担当しました。

1997年2月、2年前に先に来日留学していた夫の後を追って、娘と一緒に日本へ参りました。1998年4月から宮城教育大学の学校教育専攻の英語教育専門に研究生として、日本語を勉強しながら英語教育の勉強をさせていただきました。1999年2月、東北大学国際文化研究科の国際文化交流専攻国際資源政策論講座の入学試験を受け、博士前期課程で勉強させていただきました。修士論文の題目は「中国内陸地域における都市発展に伴う環境問題」、副題目は「フフホト市の大気汚染を事例に」。内容としてはフフホト市の大気環境の実態、その対策の現状と問題点、今後の解決への展望をまとめております。住民の環境問題解決への意識を高めることの重要さを感じ、現地調査した際、内モンゴル師範大学の学生を対象にしたアンケート調査を実施しております。フフホト市の大気汚染の重要な原因として、通常指摘される産業起因の要因に加え、民生起源（特に冬季の石炭依存の暖房など）が極めて大きな要因になっていることが明らかになり、バイオブリケットの導入など、比較的安価な対策で、大きな効果が得られる可能性があると考えております。

今年の4月から、東北アジア研究センターの環境技術移転研究部門に助手として勤めさせていただくことになりました。私にとって新しいチャレンジであり、全力を尽くし頑張りたいと思っております。どうぞ宜しくお願い致します。

新任教官紹介 (上)



ノボシビルスク オペラハウスにて「ジゼル」の一場面

冬のノボシビルスク

地域形成研究部門北アジア社会研究分野教授 工 藤 純 一

平成13年4月1日付で地域形成研究部門 北アジア社会研究分野の教授を拝命いたしました。小生はシベリアからアラスカ地域までの環境研究についてITを取り入れた独自の研究開発を行う所存でございます。何卒、ご指導ならびにご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、ロシアあるいはシベリアという言葉からどのようなイメージを抱くでしょうか。おそらく、一般に50歳代以降の人はロシアという言葉よりもソ連の方が実感としていと思います。そして、シベリアという言葉からは、楽しい、明るいというようなイメージが湧かないのではないのでしょうか。

小生は冬から春先のシベリアが大好きです。この期間、ノボシビルスクにあるオペラハウスでは毎日のように世界トップレベルのバレエが開催されます。しかも、日本円に換算して数百円程度でこの素晴らしい文化に触れることができるのです。バレエとは全く縁のない武骨者の小生ですが、昨年以来からの大ファンになりました。ノボシビルスクのバレエ団はモスクワやサンクトペテルブルグと並んで世界トップレベルです。夏の期間は世界中を公演するため、冬の期間にご当地での開催となりますのです。ジゼル、白鳥の湖、シルフィード等を世界一、二を争うトップレベルのバレリーナが演ずるのです。全くの門外漢にも感動が伝わってきます。ロシア人の奥の深さは子供のころから身につけている質の高い文化のためでしょうか。冬のノボシビルスクでのバレエ鑑賞をお勧めします。

「東北アジア学術交流懇話会」 ＝近況報告＝

本会は、今年4月で満2歳を迎え、理事長交代などもあり新たな段階に入りつつあります。今後の発展に資すべく、これまでの活動状況や動向について記します。

[理事長交代] 会則*に則り、今年3月東北大学を定年退官された徳田昌則教授から、この4月東北大学東北アジア研究センター長に就任された山田勝芳教授へと理事長の交代がありました。本会の誕生と発展に多大のご尽力をいただきました徳田前理事長には、理事として今後ともご指導いただく事になっております。

*「理事長は、東北アジア研究センター長の職にある者…」

[会員構成] 本会は、同センター教員と一般会員（個人、法人）から構成されております。一般会員数は、発会1年後にほぼ100人に、今年4月時点で110余名へと漸増しつつあります。業種別に見ますと、メーカーの方が全体の約1/4、次いで東北アジア地域関連の各種協会関係者、大学研究者、商社員などからなり、以上で全体の3/4を占めます。この事は、ロシアやモンゴルなどに対する関心の高さと、通常手段のみではこれら地域の情報が入り難いことを物語っております。残る1/4は、在職中に東北アジア地域に関係され、リタイア後もこれら地域情報を楽しみかつ研究されておられるシニア層の方とか、銀行、官公庁、新聞・放送関係者や国会議員の方々です。

[活動状況] 季刊ニューズレター『うしとら』も3年目に入り、本号で9回目を迎えました。現地「日本館」駐在員の手になる月刊紙『シベリア通信』は、昨年3月から始まってe-mail配信もされており、日本の新聞などよりも早くホット情報の入手を体験された方もおられたことと思われます。付録『新技術開発記事ダイジェスト』も、この5月で、Ⅳ号までになり、特にメーカー関係会員からの問合せが多くなっております。同センターの学術研究報告書の内、会員の方にも興味を持っていただけたような刊行物、ならびに各種セミナー



西澤会長と会談する、ノボシビルスク市長時代の
タラコンスキー現州知事（'99調査団 市岡氏撮影）

のご案内とその議事録、新聞掲載関連記事などに関しても、会員に配付しております。直近では、5月26日仙台市国際センターにて、JICAと同センター共催の公開セミナー『一衣帯水の国、中国への協力を考える』が行われ、本会も側面から支援いたしました。近県からの会員の出席もあり、中国産農産物などが話題になっている昨今、熱心な応答が印象的でした。

懇話会企画のノボシビルスク調査は昨秋で3回目になりました。ところで、この6月上旬、対ロシア政府派遣経済使節団の訪ロ（モスクワなど・ノボシビルスクアカデミータウン・極東）につきましてはTVなどでも報道されお分かりかと思ひます。当初その一部を懇話会でとの計画もあり、会員の皆様へも簡単ながら予告をして来ましたが、最終的には政府派遣の形になりましたので、懇話会としては今後に生かすべく当使節団の結果をフォローして行きたいと思ひます。

なお、4月下旬ノボシビルスク州タラコンスキー知事の来日講演会開催が予定されておりましたが、今冬の多雪を原因とする洪水発生のため急に訪日中止になりました。写真は同知事がまだノボシビルスク市長の頃に西澤会長と会談された時のものですが、古くから日本、特に東北地方に深い関心と理解をお持ちの方で、またの日の来日が望まれます。

[今後の展開] 会員皆様のご意見を反映しつつ、諸活動の一層の向上を目指したいと考えており、会員各位の忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

（岩山健三）

お知らせ

「うしとら」(第8号)の、1頁の徳田昌則氏の記事中に記載されているホームページURLへは、今のところ東北大内からのみアクセス可能であることを、お知らせいたします。このことに関して前号では記述が足りず、ご迷惑をおかけしました。

編集 後記

先の、西澤会長のエデソンメダル受章に続き、このたびは大道寺副会長がロシア連邦名誉領事となりました。本懇話会の一大慶事であり、心からお祝い申し上げたく存じます。

（成澤 勝）

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第9号 2001年6月15日発行
発行 東北アジア学術交流懇話会 編集 東北アジア学術交流懇話会ニューズレター編集委員会
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター気付
PHONE 022-217-7580 FAX 022-217-6010
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/> E-mail: iwayama@cneas.tohoku.ac.jp